

人間の絆―石田徹也の絵画を手がかりに

ロバート F. ローズ

皆さん、こんにちは。ただいま紹介にあずかりましたロバート・ローズです。今年、仏教学科の主任を務めています。私が、仏教学科の主任が仏教学会の会長を勤めることが恒例となつていますので、今日は仏教学会主催の新入生歓迎講演を行わせていただきます。

さて、早速、今日の講演に入つてゆきたいと思ひます。今日は「人間の絆―石田徹也の絵画を手がかりに」という講題を挙げておきました。皆さんにはA3の資料が配られていると思ひますが、そこに印刷しているのが石田徹也の絵です。

私は中学生のころから絵画を鑑賞するのが好きで、世界各地の美術館で様々な絵画を見ましたが、最近、特に大きな衝撃を受けたのが、この石田徹也の絵です。そこで、石田徹也について少し紹介させていただきますと、彼は一九七三年に静岡県焼津で生まれました。後に武蔵野美術大学に入学し、卒業後、少しずつ注目されるようになりました。突然二〇〇五年に、三十一歳という若さで踏切事故に遭い亡くなってしまいました。しかし、石田の絵はとてもユニークで、その亡くなった翌年に『石田徹也遺作集』が出版され、また同じ年にNHKの教育番組で放送されてい

る「日曜美術館」という番組でも取り上げられ、そのために大きな反響を得て、一躍有名になりました。石田徹也とは、このような画家です。

そこで、資料には石田の絵を四点ほど挙げておきましたが、また改めて見てみてください。皆さんには、これらの絵はどのように映りますか。惹かれますか。あるいは違和感を持ちますか。とにかく、インパクトがある絵であることは、間違いありません。数年前、石田の五周忌があったとき、それに合わせて回顧展が行われましたが、そのときの回顧展を紹介した新聞記事を見ますと、その見出しには「時代の閉鎖感を体現した風景」と書いてありました。そして、その新聞記事を少し読ませていただきますと、こんな事が書いてありました。「ひとくちに言って、彼は閉塞感が強い同時代の日本の心像風景を描いた。バブル崩壊、オウム事件、神戸連続児童殺害事件、いじめ、引きこもり、派遣切り―二百点を超える遺作には、社会の荒廃感が滲む」（読売新聞、二〇一〇年六月一〇日、夕刊）。このように書いてありましたが、まさにそうだと思います。

確かにこの数年間、新聞やテレビを見ると、悲しいニュースばかり眼に飛び込んできます。凶悪犯罪、DV（家庭内暴力）、子供のネグレクト、派遣切り、孤独死。様々な問題が次から次へと日本に起こっていることは、皆さんも感じていることだと思います。さらに、それに大きな追い打ちをかけたのが、先月起こった東日本の大震災です。このように、日本はもう完全に破綻しているという雰囲気、もうこの十年ぐらい全国を覆っています。そして、そのため大きな閉塞感が日本全土に漂っています。ただ、もちろん、東日本の震災で多くの人々がボランティアとして東北に出かけてゆき、その意味では、日本はまだまだ元氣だと感じた人々も多いと思います。それにしても、やはり日本には、息苦しい閉塞感、あるいは失望感や無力感が蔓延しているように思われます。そして、このような閉塞感をおみごとに描き出しているのが、この石田徹也の絵なのではないかと思うわけです。

そこで、資料には石田の絵を四点ほど挙げておきました。これらのなかで皆さんの心に最も訴える絵はどれでしょ

うか。以前から、これらの絵を授業などで紹介してきましたが、いつももつとも大きい反響を呼ぶのが「燃料補給のような食事」という絵です。これは、一見して分かるようにファースト・フード店を描いたものですが、そのなかには同じ無表情の店員が、整然と並んだ客に食べものを与えている絵です。しかし、それは食べものを出しているというよりは、ガソリンを注入しているような場面です。客も店員も、巨大な機械の一部となってしまう状態を描いているように思えます。

これは、明らかにファースト・フードに対する強烈な風刺であると言えるところですが、それはただファースト・フードの批判ということだけではなく、ファースト・フードを生み出すような経済システムに対する批判もこめられているようにも思います。ここに描かれている店員の顔を見ると、みんな同じ顔をしています。さらに他の絵に登場する人を見てもらえばわかりますが、みな同じ顔をしています。これは多分、石田本人を象徴しているのですが、ここで注意したいのは、ファースト・フード店の絵のなかでは店員も客と同様に大きな機械の一部、つまり燃料を補給するモノとして描かれていることです。客がモノとして扱われているならば、店員も同じようにモノ、ということですね。石田がファースト・フードを生み出した経済システムを、これほど強烈に批判するのは、それが人間の人間としてではなく、単にひとつの機械の部品として扱っているからにはかなりません。

ここで描かれているのは食事を提供する仕事ですから、人間関係を大切にすることを仕事であるはずですが、しかし、本来は人間同士のコミュニケーションが大切であるはずの仕事ですが、ここで描かれているのは、どんな客にもマニュアルで決められている同じ言葉で、同じように機械的に接するという職場です。そこでは人間らしいコミュニケーションや人間同士のふれあいは排除されているように思います。そのような状況が、この絵のなかで批判されているように思えてなりません。

そこで、この絵が私たちに非常に大きなインパクトを与えるのは、それが今日の日本をよく象徴しているからでは

リポジトリ非公開

図1 「燃料補給のような食事」『石田徹也遺作集』求龍堂、2006より

ないかと思うわけです。やはり、人間が機械化され、大きなシステムの一部になってしまい、少し誇張しているならば、人間が人間として生活することが許されない—本当に人間らしい生き方ができなくなった現代社会を描いている点に、この絵のインパクトがあるのではないのでしょうか。このようにコミュニケーションもなく、大きな目に見えない組織やシステムの一部としてしか、人間が存在してゆけないのが今の日本である—これが石田のメッセージではないかと思うのです。

同様のメッセージが託されているのが「スーパーマーケット」と題された絵です。これはコンビニのレジで、お菓子かもしれませんが、なにか商品を買っている場面ですが、ここに登場する人物はなにも考えず、ベルトコンベアーのように、自動的に商品を購入し、消費しているわけです。ここでも人間は消費の機械になってしまっているわけです。この絵も、現代社会の消費のあり方に対する、強烈な風刺・批判です。

次に紹介したいのは「飛べなくなった人」という絵ですが、私にとってこの絵が、石田の四つの絵のなかで最も寂

リポジトリ非公開

図2 「スーパーマーケット」『石田徹也遺作集』求龍堂、2006より

しい絵に思えます。これは飛行機と一体化した絵ですが、ここで注目したいことは、飛行機とは本来、飛ぶために作られたものであるということです。そのため、それは、一般的に希望の象徴でもあります。この絵に登場する人物は、多分、子供のときから大人たちに、「あなたにはすばらしい未来があるのだから、将来に向かって羽ばたいて下さい」などといわれ、それを本気で信じ、一生懸命自分なりに頑張ってきたと思われれます。皆さんは、この飛行機を、どんな飛行機だと思えますか。その図柄を少し細かく見てもらいますと、羽や胴体には、かわいいい動物のキャラクターが描かれています。皆さんはあまり経験がないかもしれませんが、私がこれを見ますと、昔、デパートの屋上の遊園地に設置されていた飛行機や自動車、あるいは電車のおもちゃの乗り物に乗って、楽しい時間を過ごしたことを思い出します。このようなことを思い出していますと、この絵の飛行機はなにか、子供の頃の夢の象徴ではないか、という気がしてきます。それは未来に羽ばたく夢の象徴ともいえます。そこで、その夢の象徴である飛行機に乗って、いざ羽ばたこう、いざ社会に出て活躍しようとなったとき、

リポジトリ非公開

図3 「飛べなくなった人」『石田徹也遺作集』求龍堂、2006より

よく見るとその飛行機は地面に固定され、まったく飛べないことに気が付くのです。そのことに気が付くとき、夢は破れ、未来への希望は消えはて、自分が完全に否定されてしまいます。この絵は、このような状況を暗示しているのではないかと思います。そのような意味で、石田の四つの絵のなかで、これが最も悲しい絵であると思います。

最後の絵も、非常に大きなインパクトを与える絵です。それは学校のなかで雁字搦めになっている人物を描いた絵です。私も、一応は大学の教員ですから、この絵を見たとき大きなショックを受けました。私たち教員は、学校はひとりひとりの個性や能力を引き出すところ、あるいは知性や教養を開花させてゆくとおっしゃっていますが、石田の見た学校の現実とは、それとは全く違うものようです。学校は生徒をコンクリート詰めにしてしまうところと見えているわけです。

以上、簡単に石田徹也さんの絵を見てきました。それで、これらの四つの絵に共通している点を考えてみますと、それは我々が、個々の人間としてはどうしようもできない大きな組織、大きなシステムのなかに引き込まれていて、そ

リポジトリ非公開

図4 「囚人」『石田徹也遺作集』求龍堂、2006より

れに束縛され、ますます孤立化してゆく姿が描かれているとは言えないでしょうか。そして、そのような状況のなかで、私たちの持つ本来の人間性が見失われているということではないでしょうか。実は、それが今の日本を覆っている孤独感・閉鎖感、あるいは閉塞感・無力感につながっていると強く感じるところです。

もちろん、人間が大きなシステムに飲み込まれ、孤立化しているということは、何も今始まったことではありません。皆さんのなかで、チャーリー・チャップリンの映画を見たことがある人はいますか。チャップリンは有名な無声映画の俳優兼映画監督ですが、彼は一九三九年に『モダンタイムス』という無声映画を創りました。この『モダンタイムス』という映画は、当時の労働者が置かれていた状況を痛烈に批判したコメディイですが、それは当時の労働者が人間として扱われず、機械として扱われていることを批判した映画でもあります。この映画には、労働者を演じているチャップリンが、文字通り、機械のなかに飲み込まれ、その機械の一部になつてしまう有名なシーンがあります。もう、おなかを抱えて笑うくらいおもしろいシーンですの

リポジトリ非公開

図5 『モダンタイムズ』の一場面 大野裕之著『チャップリン再入門』生活人新書141, 2005より

で、一度見てみてください。とにかく、ここで強調したいことは、人間が機械に飲み込まれてしまった状況が六十年以上に前、すでに映画化されていたということです。このように考えますと、石田が描いている人間性喪失の問題は、昔からの問題であるといえます。もしかしたら、それは近代という時代そのものが内包している大きな問題であるかもしれません。しかし石田の絵が取り上げている問題は、チャップリンが映画で取り上げている問題と、質的には同じでも、かなり違うように思います。それはチャップリンは、工場という、ある種特別な場所での人間の孤立・疎外を描いているのに対して、石田の場合は、学校やファースト・フードを含めて、日常生活全体が、大きな機械、大きなシステムのなかに飲み込まれている状況を示しているように思えるからです。

とにかく、石田が描いた人間の閉鎖感や孤独感、無力感は今ますます深刻になっていますし、今後さらさらに悪化してゆくだろうと考えられます。しかし、ここで重要なことは、私たちはこの閉塞感とか無力感、孤独感、なんとか乗り越えてゆかなければならないということ

す。特に、私たちのように、学生や教員も含めて、大学で学ぶものはみな、そういう状況を考え、その成果を社会に発信してゆく責任があります。そこで、このような状況を打開してゆくための重要なキーワードのひとつが、この講演のタイトルに挙げておきました「絆」という言葉ではないかと思えます。私たちの本来持っている人間性を取り戻すためには、人間の「絆」というものを取り返さなければなりません。つまり、本来の人間と人間がふれあう事のできるコミュニティ（共同体）を再構築しなければならないと思うわけです。これが重要な点だと思えます。

しかし、今日の日本で、人と人の「絆」をどう回復することができるのか。それを考えることが非常に大切なことですが、同時に非常に難しいことでもあります。そして、この問題は様々な学問分野から、様々な知識とか知恵を得て、初めて考えゆくことができるものであることも、当然なことです。例えば、経済学者の知見も必要でしょうし、教育の視点や心理学の視点、さらには福祉や行政学のノウハウも不可欠です。このような知見が全部総合され、様々な立場からいろいろ多角的な提言がなされて、初めて乗り越えられる課題なのでしょう。しかし、私がいつも思うことは、これらの学問分野に加えて、やはり宗教の立場、つまり宗教的知見に立って提言することが非常に大切ではないかということです。宗教では、人間のあり方を根源的な立場から考えます。それが宗教の立場ですので、やはり現代のさまざまな問題を考える上で、そもそも人間とはどういうものなのか、そもそも人間はなんのために生まれてきて、どのような理想を持ち、どのようにすれば本当の幸せを得られるのか—このような視点がなければ、問題の根本的解決につながらないのではないかと思うわけです。このような意味で、人間の「絆」を回復する上で、宗教的視座は不可欠であると思えます。

少々自己批判も含めていうことなのですが、従来の仏教では社会問題についてあまり積極的に発言してきませんでした。特に日本では社会の抱える様々な課題に踏み込んだ発言をしてきませんでした。しかしアメリカやヨーロッパでは、ある地域の問題を解決するためにプロジェクトチームが作られるとき、必ずそのなかには宗教の代表者（多く

すべての現象は無数の原因（因 Hetu）や条件（縁 Pratyaya）が相互に関係しあつて成立しているものであり、独立自存のものではなく、諸条件や原因がなくなれば、結果（果 Phala）もおのずからなくなること。

（中村元編、『仏教語大辞典』、一一八頁）

とあります。これは基本的な定義ですが、難しい専門用語で書かれているため、新人生の皆さんには分かり難いのではないかと思います。しかし、この定義のなかには、何百年もの仏教の思索が詰まっているわけで、みなさんも四年間の勉強を通じて縁起などの仏教のキータムをしつかり学んでいただきたいと思ひます。

さて、難しい定義を挙げてしまいましたが、それはそれとして、ここでは縁起について簡単に説明しておきたいと思ひます。しかし、それをするために、少々速回りになりますが、「空」とか、「無我」とか、「無常」とか、仏教で大切にしてきた他のキータムと関連させながら、話を進めていききたいと思ひます。そういう他のいくつかのキータムがありますが、それらと関連させながら、ちよつと説明してゆきたいと思ひます。そこで、まず「無常」から始めますが、これは簡単にいいますと「すべてのものは変化する」ということです。つまり、この世のなかのすべてのものは一瞬一瞬、変化している、ということですから、これを逆にいいますと、この世のなかで、永遠に変わらないものは何もない、ということになるわけです。これが仏教の根底にある考え方です。

みなさんは「すべてのものは一瞬一瞬、変化する」と思ひますか。常識的に考えると、だれもそうだとは思わないでしょうが、仏教ではそうだといひます。この世のなかのすべてのものというわけですから、みなさんが座っている椅子、皆さんが使っている机、私がつ持っているこの金属のマイク、私自身、あなた自身、一瞬一瞬変化しているということになるわけです。それはどうということかというかと、例えば、この私という人間を例として挙げますと、私は一九五三年に生まれました。生まれたときは約二五〇〇グラムでした。しかし、大学に入ったところから二十代前半までは、当時のヒッピー文化に触発され、髪を尻まで伸ばしていました。そして、今や、白髪が出て、老眼に悩まされる

ようになってしまいました。

このように自分のことを考えると、ふと、本来の私はだれだろうと思うときがあります。生まれたときの私が本来の私なのか、二十歳代の元氣な青年が本来の私なのか、あるいは今の私が私なのか。私だけではありません。みなさんもそうです。どれが本当のあなたでしょうか。答えは明らかです。そのような意味での本来の自分は存在しません。逆というと、生まれたときの自分はそのときの自分で、今ここにいる自分は今の自分なのでしょう。これは何を意味しているかというと、自分は―あるいは、より一般的にいうと、人間は―プロセスだということです。自分は絶え間なく変化し続けるようなプロセスで、固定したものではなくて、一瞬一瞬変わってゆく川の流れのようなものです。このように表現できるかと思えます。そして、これが実は大切なのですが、この変化してゆくプロセス―私なら私という、一瞬一瞬変化してゆくプロセスの奥には（あるいはその根底には）「これが本当の、永遠不変の私だ」といえるような実体的な「なにか」があるのではないということです。

違う例を挙げてみましょう。ご存知の方も多かもしれませんが、人間は六割から七割が水でできているといわれています。さらに驚いたことに、この水も常に入れ替わり、異論もあるようですが、約六週間で、ほぼ全てが入れ替わるといわれています。これはどういうことかというところ、今いる自分の半分以上が、六週間後には自分にはなかったということです。そのため、科学的に見ても人間は一瞬一瞬変わってゆくことがわかります。まり、人間は無常で、絶え間なく変化してゆくものなのです。そして、いつかは死んでゆくものなのです。

しかし、悲しいことですが、人間は自分が一瞬一瞬変わってゆくプロセスであるといわれると、非常に不安になります。その不安を和らげるために、変わってゆく自分のなかに、何か変化しない、永遠なものを求めて止まないのです。そして、このような要求に答えて、多くの宗教が、人間は不変な靈魂を持っていると説きます。キリスト教では、それを「魂」、「永遠の魂」といいますし、古代インドの宗教や思想では、それを「アートマン」と名づけています。

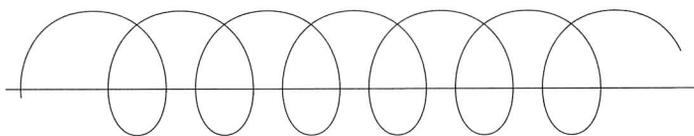


図 6

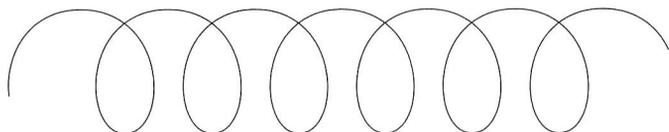


図 7

このような考えを、古代インドの宗教を例として、私なりに図式化したのが、図 6 です。この図のなかに、くるくると回る線が、一瞬一瞬変化している自分を表しています。そして、その中心を貫いている線が、自分の奥底に潜んでいると考えられている「アートマン」を示しています。少し単純すぎるかもしれませんが、このように図式化することができるのではないかと思います。

そこで図 7 に目を移してもらいますと、これが仏教の視点です。この図ではくるくる回る線のみで、それを貫く線はありません。つまり、一瞬一瞬変化する自分のみあり、その奥に何か不変な実体があるとは考えないのです。その意味で、仏教ではプロセスとして常に変化する自分しか認めないということになります。

もちろん、このプロセスしかないということは、私は存在しないということにはなりません。現に、私は今ここにいます。では、どうして私がここに存在しているかという点、先ほど出てきました「縁起」という考え方が、これを解く鍵になります。つまり、私がここにいることは様々な「因」と「縁」（つまり「原因」と「条件」）が、巧みに和合し支え合うことによつて、私が存在しているということになるのです。具体的にいうと、私を成り立たせているもののなかには、両親からもらった遺伝子があります。それが「因」、つまり直接的な原因にあたると思います。しかし、それとは別に私

を育んできた環境―国や地域の文化、自分が通った学校、さらには今まで影響を受けた友達や先生たち―もあり、それが条件となって、つまり「縁」となって、私をここに存在せしめているのです。このように、因と縁（原因と条件）が和合して私がここに存在しているということになるわけです。

ですから、そういう意味で「縁起」といわれるのですが、ちょっと難しい話になりますけれども、お釈迦さまが亡くなられてから何百年か経って、今、大体、B.C.一五〇年～A.D.一〇〇年ぐらいの頃だと言われていますけれども、大乘仏教運動が起こってきまして、この大乘仏教という運動が、今まで言いました「無我」の考え方、つまり人間はいろいろな原因や条件の和合によつて成り立っているという考え方を、人間だけではなくすべてのものに当てはめてゆくわけなんですね。ですから、人間だけではなくて、この机も、皆さんが座っている椅子も、私がつ持っているマイクも、これらも一瞬一瞬変化するもので、その中には、永遠な本質・実体というのは無いんだ、というように考えられるようになるわけです。そういう意味で、「無我」の論理をすべてのもの（これを仏教では一切法と表現しますが）に適合する新しい思想が生まれます。それが「空」の思想ということになります。そのような意味で、「無我」と「空」が仏教の二つのキータームになるわけです。少し荒っぽい説明ですが、このように考えていただければよいと思います。

でも、それは今しばらく置いておいて、先ほどの「絆」ということに戻りましょう。先ほどいきましたように、今の時代には多くの人々が「絆」を求めています。この「絆」を考える上で、「縁起」ということを使つて考えると非常に解りやすくなると思います。そこで注目したいのが、「法界縁起」という言葉です。これは、今まで紹介してきた「縁起」の考え方を、さらに発展させた思想と言つていいと思います。この「法界縁起」は『華嚴経』という經典にその源があります。『華嚴経』は非常に膨大な、かつ非常におもしろい經典ですが、その經典の思想をベースにして、中国で華嚴宗という宗派ができ、それが日本へも伝えられます。その華嚴宗のなかで展開するのが「法界縁

起」という考え方です。そこで、この「法界縁起」という考え方は、簡単に言いますと、あるものが存在するために、宇宙の他の全てのものがその存在の縁になっている、というものです。つまり、このマイクならマイクでもいいですし、私なら私でもいいのですけれども、それが存在するためには、宇宙の他の全てのものがその縁として、それを成り立たせている、ということですね。もつと簡単に言いますと、個々の人間も含めて、宇宙に存在する全てのものは、みな深いところでつながっているということですね。先に私という人間も含めて、この世のなかの全てのものは「縁起」によって成り立っていると説明しましたけれども、「法界縁起」の思想は、そのような縁起の思想をさらに発展させ、世界にある全てのものが私を成り立たせている「縁（条件）になるのだ、というようになるのです。

あまりいい例ではないかもしれませんが、具体的な例を挙げますと、私たちが存在するためには、食べ物が必要ですね。しかし、ご存知のように、今の日本で消費されている食料のほとんどが、外国から輸入されています。そのため日本に生きている私たちは、アメリカで大豆を作る人や南米チリで鮭を獲る人など、世界の各地の生産者に支えられて存在しているということになるわけですね。つまり、食という点で、私たちは世界のいろいろなところとつながっているということになります。

そして、これに関連して、もつとおもしろい説があります。これは、最近になって注目されつつある学説ですけれども、「バターフライ効果」という学説があります。バターフライとはご存知のように「ちょうちよ」のことですが、私も良く分かりませんが、「バターフライ効果」の学説は「カオス力学」という学問分野から生まれた説のようです。それで、その内容は、地球のあるところで、ほんの小さな変化が起こったとき、時にはそれが地球のほかのところでも大きな影響を与えることもある、ということを描いた学説のようです。この説がなぜ「バターフライ効果」といわれるかというと、これはひとつの比喩です。つまり、この学説を端的に表現するときに、「北京で蝶が羽を飛ばしたら、ニューヨークで嵐が起こった」という、一種のスローガンが用いられるために、「バターフライ効果」といわれている

ようです。皆さんもすでにご気付きだと思えますが、これは「風が吹けば、桶屋が儲かる」というような考え方によく似ているのですが、地球のどこかで些細な変化が起こったとき、それは思いがけないところで大きな影響を与えるかもしれない、ということ表現しているわけです。つまり、この学説によると、地球は、あるいは宇宙はひとつの大きなシステムを形成していて、そのシステムのなかの様々な部分が密接に関係しあい影響しあって存在している、ということになるわけです。そして、そのために、あるところできこった些細な出来事が、他のところで大きな影響を与えることになるのです。

これは現在の科学の考え方ですが、「法界縁起」という考え方も、これによく似ています。もちろん、昔の中国の僧侶たちが科学的に理論を構築して行っただとは思えませんが、しかし、どこか直感的に、この宇宙は深いところで全部が繋がっていて、この世界のなかのすべてのものは、互いに関係しあって存在していることを見抜いていたのでしよう。そして、このような知見をもって、華嚴宗の学僧たちが「法界縁起」の思想を構築し、展開させていったと考えられます。

そして、ここから結論になるわけですが、この「法界縁起」という思想が、先ほどから話題になっていきます人間の「絆」を考える上で、大きな示唆を与えてくれると思います。すべてのものが深いところで互いに関係しあって、つながっているということが、「法界縁起」の基本ですが、少し飛躍になるかもしれませんが、こう考えてみますと、この世のなかにいるすべての人々は、みな深いところにつながっていることになるのではないのでしょうか。そして、もしそうであれば、その事実が気づくことが人間の「絆」をつくるための最初の一步になるのではないかと思います。この地球に住む人間がみんな、お互いに、そして本来的につながっているということを見つめるとき、お互いの悲しみ、お互いの喜び、お互いの希望や苦しみ、そういうものを分かち合える道が拓けてきて、そして、私たちが本来持っている「絆」というものを取り戻すことができるのではないかと思います。

このような視点、あるいは姿勢というものが、今の日本を覆っている孤独感・無力感を打開してゆく力になるのではないのでしょうか。先ほどもいいましたように、東日本の震災で、多くの人たちがボランティアとして東北に行って支援を行っていることが報道されていますが、それを見ますと、他の人を思いやる心は、まだまだ日本には健在であることを知らされます。そういう意味で、人間の「絆」は、まだ失われてないと思うわけです。この「絆」の再確認は、悲惨な震災によってもたらされたのですが、今必要なのは私たちひとりひとりが、日常生活においても、他者との「絆」を構築してゆくことではないでしょうか。そう考えるとき、仏教の「縁起」、または「法界縁起」の思想、つまり全宇宙がとこか深いところにつながっているという発想が、ひとつの重要な視座を与えてくれるのではないかと思います。

まとまりのない講演になってしまいました、これで終わらせていただきます。